

第二部門 〈子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ〉 入選論文

「ふるさと塾」の実践記録

―子どもが主役の地域教育活動

黒澤賢一

くろ さわ けん いち
黒 澤 賢 一 さん

[略 歴]

- 年 齢 51歳
住 所 福島県いわき市
略 歴 茨城県北茨城市出身
早稲田大学大学院政治学研究科修士課程修了。大学、専門学校講師を経て、福島県いわき市でいわきセミナーを主宰。いわきふるさと塾塾長。
- 著 書 『安寿と厨子王伝説』（歴史春秋社）
『京都 街角の伝説』（本の泉社）
『桜田門外ノ変』（宮帯出版社）
『義経北行伝説』（本の泉社）
『新島八重伝説』（三省堂書店）ほか。

[応募動機及びコメント]

子どもたちと地域の歴史を調べ歩くふるさと塾の活動を続けて20年が過ぎました。この節目の年に、これまでの活動を実践記録としてまとめておくのも意義あることではないか。それが応募の動機です。

振り返ると、いろいろなことがありましたが、かつてこの活動に参加した塾生たちに会うと、「楽しかった」という話をしてくれる人がほとんどで、この活動の日々が卒塾生たちの心に今も刻まれていることに驚かされ、またうれしくなります。

今回の受賞は、論文を書いた私ではなく、これまでこの活動に参加してくれたすべての子どもたちが頂いたもの。そう思っています。

本文の概要

福島県いわき市で子どもたちと地域の歴史や文化を調べ歩く「いわきふるさと塾」の活動を続けて二十年が過ぎた。これまでこの活動に参加した子どもたちは三百人をこえる。本稿ではまず、ふるさと塾誕生の経緯についてふれ、その活動方針や活動時期、運営方法について、その概要を述べる。それをふまえて、参加した子どもたちが具体的にどのような活動してきたのかを「実践記録」として詳細に紹介していく。

ふるさと塾は個人学習塾が主体である任意のボランティア団体ではあるが、毎年、参加者が絶えることなく、四月から夏休みまで、それぞれが興味をもったテーマについて自主的に調べ、わかったことをレポートにまとめ、最終日に発表会を開く。年によっては、発表会に保護者も招いたり、地域住民にも開放して講演会として開催し、また調査結果を本にして出版したりもした。さらに地域の伝説をまとめたマップを作成し、市内のすべての中学生に配布した。

その取り組みはマスコミなどでも取り上げられ、地域教育活動の先進モデルとして注目され、全国各地にそれぞれの地域名を冠した「○○ふるさと塾」が創設されて、いわきふるさと塾の活動を参考にした取り組みが広がっていった。

しかし二〇一一年には東日本大震災、福島第一原発事故に遭遇し、活動の拠点としていた教室は半壊。放射能汚染のために活動休止に追い込まれた。その後、町は震災と原発事故からの復興が最優先され、子どもも保護者もボランティア活動などにはなかなか興味をもってもらえるような状況ではなくなってしまうが、試練を乗り越え、新たな活動内容を見出して今も活動を継続しているふるさと塾の現状を紹介して結びとする。

はじめに

東北の小さな町で中学生を中心とする子どもたちと地域の歴史を調べ、地域に語り継がれる伝説や昔ばなしを蒐集して歩く活動をボランティアで続けて、二十年が過ぎた。

この間、この活動に参加した子どもたちは三百人を超える。参加者が多い年も、少ない年もある。また東日本大震災、福島第一原発事故後は活動の拠点としていた教室が半壊し、放射能の数値がなかなか下がらないために休止に追い込まれ、そのまま活動を終了せざるを得ないと思われる状況に直面したりもした。

これまで活動を続けて来られたのは、毎年、呼びかけに応じて参加してくれる子どもたちがいたからである。

本稿では、活動二十年を迎えたふるさと塾の誕生からこれまでの活動の経緯を振り返り、そこから得られた地域教育活動の教訓などについて論じてみたい。

「いわきふるさと塾」の誕生

福島県いわき市錦町に高校受験のための学習指導を主とする学習塾を開いたのは一九九六年十二月のことだった。塾を開いても、生徒が集まらずにその半数以上は半年以内に消えていくと言われる厳しい業界だが、幸いにも私塾は、開塾と同時に塾生が順調に集まり、一か月後には早くも継続していける展望が開けた。翌年の四月に新年度を迎えると、さらに生徒が増えて、塾は軌道に乗った。

そして迎えた初めての夏休み。学校が休みになった子どもたちと朝から受験勉強をするようになり、子どもたちは昼食を持参して夕方まで塾

で過ごした。特に中学三年生は高校入試が半年後に迫り、熱心に受験勉強に取り組んでいたが、日が経つにつれて疲れた様子も見せるようになり、気分転換にと、勉強の合間に子どもたちを連れ出して町を歩くようになった。

もともと郷土史に興味があった私は、中学生の時には郷土研究クラブに入って地域の歴史を研究し、卒業後も長く語り継がれてきた伝説や昔ばなしを地域のお年寄りから聞き取り、蒐集することを続けてきた。

そうした活動を通じて出会ったお年寄りは、もちろん高齢の方ばかりで、その方たちが存命しているうちにできるだけ多く話を聞いて、だれかに伝えておかなければ、文字に記されていない地域の歴史や長く語り継がれてきた伝説や昔ばなしはそこで途絶えてしまうのではないかと、いう危機感を抱いていた。

子どもたちは、少しでも成績をのばし、志望校に合格するために学習塾に通ってきていることは十分理解していたが、いま自分の目の前にいる子どもたちに、お年寄りから聞いた地域の歴史や伝説、昔ばなしを伝えていけば、彼らがやがて「語り部」となり、それらを伝承する人材になり得るのではないか。そう考えて、私が調べて集めた話を聞かせながら地域を歩くことにしたのだ。

でもそのことは、最初は子どもたちには話さなかった。ただ子どもたちといっしょに地域をぶらぶら散歩しながら、そこにある、例えば石碑に書かれていることの意味を話して聞かせ、なぜそれがそこにあるのかを説明する。お地蔵さまの前を通ると、その由来やお地蔵さまにまつわる昔ばなしを話して聞かせる。川のそばを歩くと、その川に語り継がれてきた伝説を紹介する。

はじめは、子どもたちは嫌な顔をして、どうせ私の話になど耳を傾けてくれないのではないかと想像していた。ところが、どの子も話を聞いてくれる。質問もしてくる。真剣な眼差しで地域の歴史や地域に伝わる

伝説や昔ばなしを知ろうとしている。そのことを肌で感じた。

散歩を終えて教室に戻ると、子どもたちは言った。「また行きたい」「今度は、いつ行くんですか」「こんな話が近くにあることを全然知らなかった。もっと知りたい」と。子どもたちはキツカケさえ与えれば、いろいろなことに興味を持ち、自ら進んで学ぼうとする力を持っていることを、その時、教えられた。

学習塾を開いて教育の一翼を担わせていただいているのだから、地域とも積極的に関わりを持ち、塾を開いている地域に、そしてそこに暮らしている子どもたちにもできることをしていこう。

そこで考えたのが、ボランティアで子どもたちと地域の歴史や文化を学ぶ地域教育団体「いわきふるさと塾」の創設だった。

ふるさと塾の運営方法

いわきふるさと塾を創設したのは一九九七年十一月のことだ。もう二十年以上も前のことになる。活動そのものは翌年の春から開始することにして、まずは活動方針などを決め、必要な郷土資料を古本屋で購入し、入手が困難なものは図書館でコピーするなどして年末から少しずつ準備を進めていった。

長く活動が続けていくためには、だれでも自由に参加し、自由に活動できるようにしたほうがいい。子どもたちに活動を強制したり、それぞれの自由な考えを拘束するようなことがあってはならない。そこで三つの活動原則を決めた。

一つは中学生、高校生なら、私が開いている塾の塾生でなくても希望する者はだれでも参加できる。勧誘は一切しない。二つ目は、活動期間は毎年春から夏休みまでとする。高校受験や大学受験に向けた勉強は夏休み明けから忙しくなるので、これは受験生の負担を減らし、また参加

者が受験勉強と両立できるようにするための配慮である。三つ目はたとえ活動に参加しても、来られる時に来ればいいことにする。途中でやめてしまってもいい。また部活動や生徒会活動などが忙しくて来られなくなっても、来られるようになったらまた来ればいいと、参加を強制しないことにした。

ふるさと塾では参加した者が興味があることを自由に調べ、それにアドバイスしていくという活動スタイルをとることに決めた。そのために必要な資料は、開講時にそれぞれが希望する調査・研究テーマを聞いて、こちらが用意しておく。さらに必要がある場合は、教室での文献調査に加えて、私が同行して聞き取り調査や現地調査にも行く。

ところがこれは、参加人数が数名程度（十人をこえない）うちほうまく機能していたのだが、人数が増えてくると参加者とじっくり向き合っ指導する時間が確保できなくなり、活動開始から四年が過ぎた二〇〇一年からは、参加者をいくつかのグループに分け、グループごとにその年の研究テーマを決めて調査を進めるというスタイルをとるようになった。研究テーマは、こちらが予め用意したものでも、参加者が自由に決めてもいいことにしている。

参加者は未成年であるので、必ず保護者の同意をいただく。その際、保護者のみなさんにお配りする「いわきふるさと塾」の規約にはこう記した。団体の名称は、いわきふるさと塾。目的は地域の歴史や文化を子どもたちが自ら調べ、それを実際に訪ね歩いて、レポートにまとめることで、ふるさとを知り、地域の歴史や文化を継承し、ひいては青少年の健全育成にも貢献し、同時に調査研究の成果を地域住民にも公開することで、地域の歴史と文化を後世に伝える役割をも担う。それを達成するために、地域の歴史や文化の調査研究。調査結果をまとめた報告書等の作成。講演会や研究発表会の開催。その他、目的達成のために必要な事業を行うこととし、塾は毎年春から夏まで活動し、その期間は月二回、

土曜日の午後から夕方にかけて塾を開く。塾生は中学生、高校生を対象として毎年春に募集し、希望する者はだれでも参加できる。本塾はあくまでボランティアで行うもので、塾生および保護者からは一切の費用を徴収しない。

ふるさと塾ではよく「NPO法人（特定非営利活動法人）」にはしないのか」という質問を受ける。ふるさと塾創設の時点では、そのような制度はまだ存在しておらず、これまで市の関係者などにもすすめられて何度かNPO法人化することを検討はしたが、設立時の種々の届出書類の作成や法律で義務づけられている毎年の事業報告書、収支計算書などの作成提出に労力をとられることよりも、子どもたちの指導に専念し、何にも束縛されない自由な活動をしたいという観点から、現在まで任意のボランティア団体としての活動を続けている。

それも、ふるさと塾を運営しているのは、私一人であり、経営している学習塾の運営・指導と両立させてそれらの事務作業をすることは難しく、何より活動するにあたってNPO法人にする必要性を感じたことがなかったからである。

また活動開始から五年を過ぎた頃からは、ふるさと塾の卒業生が大学生になり、自らボランティアで活動のお手伝いをしてくれる人もいて、彼らはチューターとして子どもたちの指導にあたっている。年によってばらつきはあるが、毎年、私を含めて三〜五人で子どもたちを指導する体制が整っている。

以上が、「ふるさと塾」誕生の動機とその運営方針、活動内容などについての概略である。

ふるさと塾の実践記録

(一) 参加者の募集

子どもたちと地域の歴史や文化を学ぶ地域教育団体「ふるさと塾」は、一九九八年四月から本格的に活動を始めた。参加者の募集は二月から行い、まず私が開いている学習塾の生徒に参加者募集を知らせるプリントを配り、公民館などの公共施設にも参加者募集のポスターの掲示をお願いし、新聞社やテレビ局、ラジオ局にもそれらを送付する。

公民館などは掲示してくれるところと、そうでないところがあった。掲示してもらえないところの見解は、「学習塾が主体となつて運営しているものだから、ふるさと塾の活動は学習塾の生徒募集に利用するものとみなされ、掲示することはできない」というものだった。これに関連して、参加人数が増えてきて、学習塾の教室が手狭になり、公民館の会議室の利用申請をした際にも、利用を拒否され、交渉しても利用許可はおりなかった。

NPO法人であれば、申請するとすぐに使用許可がおりており、これは任意のボランティア団体としての限界を思い知らされた事例となった。NPO法人であれば得られる団体への信頼が任意団体ではなかなか得られないという現実を目の当たりにすることになったのである。

一方、福島の県域紙二紙といわきのローカル紙は好意的に活動を紹介してくれ、募集告知をはじめ、これまで何度も活動内容を記事として紹介してくれ、福島のローカルテレビ局も夕方の県域ニュースなどで地域の話題として放送してくれている。またコミュニティFM放送局でも情報番組などで紹介してくれ、塾生たちがスタジオに呼ばれ、生番組で活動の内容などを話し、市内全域に放送されたりもした。

その後、インターネットが普及すると、ホームページやブログなどで

募集のお知らせをするようになり、また活動が地域のみなさんに知られていくと、口コミで、さらにこの活動に参加した子どもや保護者の紹介で参加してくる子どもが増えるようになり、募集チラシ、ポスター、新聞やテレビ、ラジオでの告知、ホームページ、ブログ、そして口コミと、さまざまな媒体を利用して参加者の募集は行われるようになった。

(二) ふるさと塾の一年

毎年四月から夏休みが終わるまで、月に二回、土曜日の午後から夕方にかけて、ふるさと塾の活動は行われる。参加人数は年によって大きく変わるが、平均すると毎年十五、六人程度で、多い時は五十人、少ない時は二、三人程度という時もある。二、三人程度というのは東日本大震災後の数で、震災前は二ケタを下回った年は一度もなかった。

参加者たちはそれぞれの調査テーマについて、まずは文献調査を行う。必要な資料は事前にこちらで用意しておくが、図書館などに行つて自分たちで資料を探すという経験もさせるため、最低でも一回は図書館を訪ねるように仕向けている。

まずは本で調べる。そしてわかったことをノートに書き出していく。ここ数年は、中学生でもスマホを持っている生徒が増え、ふるさと塾ではスマホの持ち込みも認めているので、インターネットを使って調べる場面も年々増えてきた。こうした活動は五月まで行う。

六月になると、文献調査に加えて現地調査に出かける。本やインターネットで調べてわかったことをふまえて、実際にその場所を訪ね、また歴史に詳しい地域の方に話を聞いたりする。聞き取り調査については、事前にこちらで歴史に詳しい方を探し出して、子どもたちに話をしているだけのお願ひしておく場合が多いが、参加している子どもの保護者の方からそうした方を紹介していただけることもあり、ふるさと塾の活動は、子どもたちだけでなくその家族も巻き込んでいく場合も多い。

また参加できるのは中学生、高校生としているが、兄弟が参加していて、いっしょに活動したいと小学五、六年生の弟、妹からも保護者を通して参加を認めて欲しいというお願いがくることもあり、その場合は兄弟が面倒を見ることを条件に認めている。このような家族は、ふるさと塾の活動日のほかにも、家族みんなで地域を訪ね歩いたりすることもあるようで、ふるさと塾は家庭教育にも影響を与えている。

文献調査、現地調査、聞き取り調査を終えると、ちょうど夏休みが始まる頃になる。夏休みには、それまでの調査結果をグループごとに各自協力してレポートにまとめる。必要ならこの時期に調べ足りないことや新たに生じた疑問などについて補完調査を行い、レポートに写真も貼付したいという希望があれば、現地の写真撮影なども行う。なおレポート作成に必要な用紙、カメラはすべてこちらが用意しておき、写真のプリントもしてあげる。

こうして夏休みが終わるまでにグループごとにレポートが完成し、最終日は参加者全員を集めて発表会を開く。そのためのレジュメはレポートを要約したもので、これは事前に各グループから出されたものをコピーしておき、当日、全員に配る。発表会の最後には、駄菓子と飲み物を配り、簡単な打ち上げをして、その年の活動を終えるのが恒例になっている。子どもたちの一つのことをやり遂げた達成感で満ちあふれた笑顔を見るのが毎年楽しみで、「また来年もがんばろう」という元気をもらえる瞬間でもある。

(三) 活動の広がり

自分たちで調べてわかったことをレポートにまとめ、みんなの前で発表する。これで活動は終わるはずなのだが、年によっては子どもたちからさまざまなアイデアが出され、いろいろな形に発展して活動が行われた年もある。

① 保護者のみなさんを招いての発表会

参加した子どもたちだけでなく、その保護者のみなさんにも研究成果を聞いてもらおうと、参加した生徒の保護者にも発表会の案内を差し上げ、子どもたちと保護者を対象にした発表会を開催した年がある。これは、「私たちも子どもたちの発表を聞いてみたい」という保護者からの要望に応えたものである。

この場合、私塾の教室では全員を収容できないので、市民会館の大会議室を借りて開催する。公民館にもホールがあり、市民であれば無料で利用できるはずなのだが、事情を話してもやはり使用許可がおりず、おカネを払えばだれでも使用できる市民会館を借りることにした。

② 地域のみなさんにも開放しての発表会

保護者だけでなく地域のみなさんにも聞いてもらいたいという声も子どもたちから上がり、地域住民にもお知らせして発表会を開催する年もある。告知は新聞社にお願いして、地域の催し物コーナーに開催日時や場所を載せてもらい、またコミュニティFM放送局で告知をさせていただいたりする。

会場は当初、市民会館の大会議室を利用したが、当日、何人の方が来られるのか、まったく予想できず、イスをどれくらい並べたらよいか。レジュメを何部コピーしておけばよいか見当がつかなくて苦労したため、二回目以降は七百人ほど収容できる市民会館の大ホールを借り、レジュメも配布せず、それをプロジェクターでステージに映し出しながら発表するという方法をとっている。

③ 調べたことを本にして出版する

二〇〇二年には子どもたちが調べたことを原稿用紙にまとめ、本にして出版する取り組みを行った。ふるさと塾の活動には、一年だけ参加する子どもも、二年、三年と続けて参加する子どももいる。前年から参加していた子どもたちが、調べたことを本にすれば、地域の人みんなに広く

知ってもらえるのではないかと提言し、ほとんどの子どもたちがそれに賛同した。本を出版することなど、ふつうなら一生のうちに一度もないことかもしれない、本を出そうという呼びかけに子どもたちが色めき立っていた。

ただ、今なら手持ちのパソコンに子どもたちが書いた原稿を入力し、パソコンできれいに編集すればそれをそのまま本にしてくれ、しかも一冊から驚くほどの低価格で手軽に作れるサービスがインターネット上には多数あるが、こうしたオンデマンド出版は、当時はまだ普及してなかった。

本を出版するとなると自費出版ということになり、百万円もする費用をどう捻出するかが、大きな課題となった。

そんな時、新聞広告に目が留まった。自動車メーカーが「あなたの夢をかなえます」という企画を実施し、夢を文章にまとめて送り、選ばれた人にはその費用を全額負担するというのだ。早速、子どもたちの夢を綴って応募した。すると全国から寄せられた八千三百もの夢の中からふるさと塾の子どもたちの夢が採用され、その助成を受けて本を出版することができることになった。

最終審査にあたられたのは、谷村新司さん、コシノジュンコさん、秋山仁さん、諸田玲子さん、伊藤穰一さんらで、子どもたちにそのことを伝えると大喜びし、この年のふるさと塾の活動は大いに盛り上がった。

さらに地元のテレビ局から本を完成させるまで取材したいという依頼があり、本ができるまでの日々は随時、夕方の県域ニュースの特集コーナーで放送されることになった。

本は福島県内の出版社に製作を依頼して無事に完成し、それは県内のすべての書店にも並び、インターネット書店にも出品されて、出版から十六年が過ぎた今も書店に並んでいる。また地元のすべての小、中学校にも寄贈し、総合学習の教科書として今も使われ続けている。

この年はちょうど学校完全週五日制が始まって、子どもたちは毎週土、日曜日が休みになった年でもあり、子どもたちの週末教育の受け皿が模索されていた時期で、このふるさと塾の取り組みは先進的な地域教育のモデルの一つとして全国から注目され、東京に本社がある三大紙やNHKなどからも問い合わせや取材が相次いだ。

④ 「ふるさと伝説マップ」の作成

二〇〇八年にはいわき市内に語り継がれてきた昔ばなしと伝説をまとめた「いわきふるさと伝説マップ」を作成した。この二、三年前から子どもたちのほとんどが昔ばなしや伝説の蒐集に取り組み、すでに八十四もの話を集めていた。それをもとにすべての話について、さらに図書館で資料を調べ直し、実際に現地を訪ね、お年寄りに聞き取りの再調査をするなどして、説明文に写真を加えて地図にしたのだ。「地図にまとめたら、よりわかりやすくなるのではないか」という子どもたちからの提案がきっかけだった。

とは言っても費用はかかる。当初は、パソコンで打ち出した簡易なものにする予定だったが、それまでの地道な活動が認められて日本財団の助成事業に選ばれ、たて約四十センチ、横六十センチで、四ページ、フルカラーのマップが完成し、これは参加者だけでなく、市教育委員会を通じて、市内のすべての中学生一万二千人にも学校で配布され、公共施設にも置かれることになった。

折しも、学校では総合学習の時間が設けられた時期と重なり、マップはそのための資料として活用され、学校によってはこのマップをもとに地元の伝説ゆかりの地を訪ね歩いたり、このマップでとり上げた伝説をもとにして文化祭で劇が上演されたりと、さまざまな場面で活用されることになった。

さらに市内の複数の小学校からも全校児童にマップを配布したいという要望が届き、希望する小学校にも無償で配布した。

⑤ふるさと塾講演会の開催

毎年、最後は発表会を開いてその年の活動を終了するのが通例だが、年によってはその規模を拡大して「ふるさと塾講演会」を開催した。これは市民会館の大ホールを借りて、市民に広く参加を呼びかけて開催するもので、第一部では塾長である私が、例えば「伝説が現代に伝える教訓」「伝説は地域の宝物」「ふるさとの歴史を旅する」などと題して講演し、それに続く第二部では子どもたちが調べたこと、そこから学んだこと、感想などをグループごとに発表していく企画である。

この講演会は大変好評で、市内だけでなく市外からも毎回、楽しみに聴講してくれる方がいて、ふるさと塾の活動が近隣市町村にも知れ渡っていることを認識させられる場となり、他の地域から教育関係者が視察に来ることもあった。

⑥まとめ

このように、ふるさと塾の活動は子どもたちが興味を持ったことを調べ、それをレポートにまとめて、みんなの前で発表するという骨格は毎年変わらないが、レポートにまとめたことを本にしたり、地図にまとめたり、発表会を地域のみなさんにも開放して講演会として開催するなど、年によってさまざまな試みを行ってきた。それらはすべてそれぞれの年の参加者の提案によるものであり、こちらから指示してそうさせたものではない。子どもたちが自らふるさと塾の活動を広げてきたと言える。

おわりに

― 岐路に立つふるさと塾

活動を開始して二十年が過ぎたふるさと塾だが、活動休止に追い込まれた年がある。二〇一一年。東日本大震災と福島第一原発事故が起きた

年だ。それまで活動に使っていた教室は半壊して取り壊されることになり、ふるさと塾は活動の拠点を失ってしまった。もちろん学習塾も閉鎖に追い込まれた。福島第一原発からわずか六十キロのところにある塾の周辺にも放射能が降り注いで、子どもたちも私も避難を余儀なくされた。線量が下がりはじめてから代わりの教室を探したが、どこも地震の被害にあって使えず、やむを得ず、同じ市内ではあるが、別の地域（いわき市平）に教室を借りた。しかし再開しようとしても線量はまだ高く、中学生らを対象とした学習塾、ふるさと塾は再開できないまま、年を越すことになった。

ようやく町が落ち着きを取り戻してきた二〇一二年春から学習塾を再開し、ふるさと塾も参加者の募集を始めたのだが、余震はまだ続き、線量が下がったとはいえ、震災前の倍以上もあることから、子どもたちも不要な外出は避けるようになり、ボランティア活動などへの参加に興味をもってもらえるような状況ではなくなってしまった。

二〇一四年ごろになってようやくぼつりぼつりと参加者が集まるようになり、活動を再開したのだが、通学路や市街地の道路などは除染されていないも、伝説ゆかりの地が多くある山間部などは手つかずのまま、線量が高いホットスポットも点在し、それまでのような活動をすることはできなくなり、現在は「通学路にある町の歴史を探ろう」というテーマで、子どもたちが毎日通っている身近なエリアに限定し、子どもたちの安全を第一に考えて活動を継続している。しかし参加者は毎年わずかで、かつてのような賑やかさはなく、ふるさと塾は今、岐路に立たされていると言えるかもしれない。

それでも、活動開始からこれまで全国各地の教育関係者、教育団体、学習塾などからふるさと塾の活動についての問い合わせがあり、それぞれの地域名を冠した「〇〇ふるさと塾」という形で、いわきふるさと塾を先進モデルとした活動が各地で行われるようになり、この活動が全国

に広まっていったことは喜ばしい限りである。

いわき市内でも広く認知され、今では公民館もいつでも貸してもらえるようになり、私自身も市が主催するボランティア活動の講演会や研修会の講師として呼ばれ、福島県からは青少年育成県民会議講師を委嘱され、県内の市町村や学校、教育団体に招かれて講演して歩いたりしました。

それ以上に、ふるさと塾の卒塾生には、都会に出ていくのではなくふるさとで生活を続けたいと市役所に就職したり、消防官、警察官、看護師になって活躍する人も多く、公立学校の教員となった卒塾生はふるさと塾での経験をもとに受け持った生徒たちと地域の歴史を調べ歩いたりしているという話を聞くと、かつて子どもたちの心に蒔いた種は少しずつ花を咲かせているように思う。

そして今、ふるさと塾は新たな活動を始めている。それは震災と原発事故の記憶を「語り部」として語り継いでいく活動である。要望があれば、震災の遺構をいっしょに訪ね、あの日の出来事を震災、原発事故を経験した子どもたちとお話しさせていただく。まだ活用事例は少ないが、そんな取り組みも行っている。

岐路に立たされてはいるが、ふるさと塾の旗は決して下ろさず、これからも地域教育の一翼を担う役割を担わせていただけたらと思うている。